

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「毎日の暮らしの中でその人らしい生き方を見つけ出したい」と共に、ここで暮らすことが人生の中で一番幸せと感じていただけるような家庭的なホームを目指します」との理念をつくり上げている。	ホーム独自の理念が作られている。全体会議や毎日の引継ぎ時に話し合ったり、研修材料の印刷物に理念を書き込むなど日々の実践につなげている。理念に反した言動などがみられた時には職員同士で注意したり、全体会議で話し合うなど周知徹底するように努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	お花見、お祭り、どんど焼きなどの地区の行事に参加している。また中野小学校、高丘小学校とは運動会や文化祭等に参加し交流している。バーベキュー大会を開催し近所に開放している。近所の人は野菜やくだものを気軽に持ってきてくれる。	地元自治会に協力費を支払っており、必要に応じて情報を頂いている。地区公民館主催の文化祭などにも招待され参加している。市内の小学校で開催される高齢者を対象とした音楽会にも参加し小学生からの感想文もホームに寄せられている。近くの小学校の運動会に招待されたり、中学生の職場体験学習の受入れ、オカリナ演奏のボランティアの来訪などもある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	全体会議にて、職員一同で話し合いをしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ホームの近況報告や話し合いをしている。家族代表、行政、地域包括、理事長、管理者、計画担当がメンバーとして参加している。地域密着型サービス、看取り、GH改正消防法等について話し合われている。	ユニットの増設が昨年3月にあり、新規入居者への対応や新規職員の教育等で今年度は2回のみ開催にとどまっている。家族の代表、区長、民生委員、市担当部署職員、地域包括支援センター職員、法人理事長、職員が出席し、活動報告や課題についての話し合いを行っている。	出席メンバーの集りやすい曜日等を調べ、2ヶ月に1回開催できるように調整していただきたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市担当者や包括支援センターとは生活保護、独居家族の支援について具体的な連絡を取り合い、相談、報告している。	毎月第3火曜日に市が主催している「保健・医療・福祉事例検討会」に管理者と計画作成担当者が出席しており、その場で行われる研修会で「若年性認知症介護」をテーマに計画作成担当者が発表したこともある。この会議には今後他の職員の出席も検討している。市より派遣される介護相談員2名が定期的に来訪し、入居者の相談にのり、報告書が後日寄せられている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日中は施錠はせず、チャイムや見守りによるケアを実践している。夜については家族の了解を得て、利用者の安全を確保する必要がある場合は施錠することもある。	日中、玄関の施錠はしていない。昨年3月増設当初外出傾向の見られる方がいたが見守りにより気配を感じ職員が散歩に同行した。現在身体拘束を必要とする方はいない。職員も身体拘束については内部研修等で学び正しく理解している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	全体会議で、勉強会を開き職員も理解している。		

ヒューマンヘリテージ安源寺・EASTユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	全体会議で、勉強会を開き職員も理解している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用契約時には文書で示し、口頭で説明する。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	市の介護相談員を受け入れている。	自分の思いを表すことのできる方が半数ほどおり、要望等は日々の会話の中で聴き取っている。家族会は作られているが今年度は増設への対応で繁忙であったことから活動は行われていない。家族等の要望や意見はホームへ来訪した時や電話などで伺っている。遠方の家族も1ヶ月に1度は訪れており、多目的ホールなどで入居者と一緒にお茶を飲むこともある。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月一度の全体会議を行い意見や提案を聞く機会を設けている。	毎月一回、法人理事長も出席し全体会議を開き意思統一を図っている。会議は午前中に行なわれており、業務上のシフトの関係もあるがほぼ全職員が出席している。ユニット毎の職員の固定化はしていないので全員が運営やサービスについて共通の認識をもっている。職場として全体に明るい雰囲気があり、全体会議だけでなく日常的にも発言しやすい。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	常に、労働時間と仕事内容を把握し外部類似施設の給与水準と比較しバランスをとっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	定期的に施設の理念を確認し、職員の毎日のケアの中においても職員の力量に合った自己実現がされているか確認している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	長野県宅老所・グループホーム連絡会を中心にネットワークを結び、定期的に他ホームとの職員交流を行い、職員とサービスの質の向上を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご利用前から本人・家族と面接し、希望・要望を確認し、できるだけ意向に添えるよう取り組んでいる。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	どんなことでも、相談していただくようにお伝えしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人の意思を確認し、その方にあったサービス利用を紹介したり相談にのっている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	昔の生活経験、習慣を尊重し、それを活かして過ごす事が出来るよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の希望や昔からの趣味、特技をいかしていただけるよう家族と一緒に話し合い、ここで楽しく毎日を送っていただけるよう考えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人が希望した場合、行きたい場所には、お連れしている(自宅、店)面会、電話のとりつぎ、面会の場所を作り開放的にしている。	ホームのある地区からの入居者がいるのでよく友達の訪問がある。自宅のお仏壇が気になり自宅へ帰りたいという入居者に付き添い、自宅や友人宅へ送り届け、また迎えに行くということも行なっている。市から無料の理美容券が出ることもあり、近くの馴染みの美容院へ2~3人で行くこともある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員が中に入り、雰囲気作り、仲間作りができるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後も家族の方・本人が訪問しやすいように努めている。退居後もその後の状況把握に努めるように連絡をとりあっている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	できる限り、一人ひとりの思いや意向について関心を払い、把握するよう意見を出し合い、話し合っている。	自分の思いを表すことのできる方が半数ほどいる。入居前に生活歴などの聞き取り調査がされており、職員は入居者の性格などを把握している。職員は入居者の話を気長に聞くように努めており、日頃の会話の中にも新たな発見があり支援に役立てている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人の希望を聞いている。出来る限り今まで通りの生活が出来るように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	見守り、観察を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族の希望、意向を尊重しながら、より良い生活ができるよう検討している。	職員の担当制をとっており、入居者の困っていることなどを聞いたり家族の希望を取り入れ、他の職員の意見も交え計画作成担当者が最終のケアプランを作成している。3ヶ月ごとの見直し期間も設けられている。本人の状態が変わった時や要望等に変更・追加があった場合には計画を立て直している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の記録は必ず日誌に書くようにしている。		

ヒューマンヘリテージ安源寺・EASTユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時のニーズに応じ、柔軟な支援を臨機応変に行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域区長、民生委員、介護相談員等に協力を得て、ホーム内では対応できない事項等の支援を頂いている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人、家族と相談し、かかりつけ医等で受診している。	入居前のかかりつけ医の継続を基本としているが、家族の依頼によりホームに近い協力医へ変更する方が増えている。入居者の縁者に医師の方がおられ、来訪時に好意で他の入居者の診察などをして頂くこともある。家族の代わりに職員が受診に付き添う場合は結果をその職員から家族に電話にて報告している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	必要な場合には市の保健師、栄養士に相談している。訪問看護事業所との医療連携を考えている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院関係者と相談、情報交換している。入院中職員が面会に行き、医師、看護師から状態、経過等を聞いている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	全体会議で終末ケア等について職員全員で話し合っている。状態により早いうちに家族、主治医と話し合いを行っている。これから本人、家族と話し合いを行う利用者の方も多数いる。	「重度化や終末期にむけての指針」については策定を検討している。現在までホームでの直接の看取りは行われていない。救急で病院に運ばれ病院で亡くなるケースが多く、この1年間で3件ほどある。訪問看護については導入を検討中である。	ホームとしての「重度化や終末期にむけての指針」を定め、入居者や家族に早期の段階から示し、チームとしての話し合いを持ち、段階に応じて対処していただきたい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変、事故発生時について慌てず対応できるよう会議で話し合っている。職員全員が応急手当等の訓練を、これからは定期的に行っていきたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署の方、近所の方に来ていただき、昼、夜の避難訓練を行っている。近所の方に協力をお願いし、承知していただいている。	重要事項説明書には年一回の避難訓練が記されている。スプリンクラーや煙探知機等が設置され、消防署よりの点検にも合格している。自動火災報知器や万が一の時にホーム近隣の方に知らせるための回転非常灯も整備されている。今年度は、増設等の諸事情により避難訓練は実施されていない。	増設から1年が経つことから、年間計画に組み込み、入居者や近隣住民の協力を得ながら避難訓練を実施していただきたい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉かけや対応、記録等には一人ひとりの気持ちを大切にしている。	内部研修により入居者の尊厳やプライバシー保護について周知徹底を図っている。基本的に入居者への呼びかけは名前「さん」を付けて呼んでいる。お手伝いをしていただいた時には感謝の気持ちを言葉で表現し伝えている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の話しをじっくり聞く。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日の流れの中にも一人ひとりのペースを保てるようにしている。利用者に関わる時はゆったり優しく対応するよう心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人が望む時、望む店に行けるようにしている。訪問理容を受けている方もいる。毎朝くし、お化粧品道具を渡し、おしゃれにさせている方もいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	盛りつけや色あいに食欲をそそるような工夫をしている。利用者の方に準備・片付けを一緒にやっていただいている。できるだけ職員と利用者と一緒に食事を摂る。	高齢化により塩分や水分に制限を加えざるを得ない方が少しずつ増えてきており、調理方法や盛り付けに工夫をしている。2ユニットとも同じ献立になっており、介助を必要とされる方も若干名いるが職員も同じテーブルで食べている。入居者もジャガイモの皮むきや後片付けの手伝いをしており、やや時間はかかるものの調理をしていただける方もいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりに合わせて盛りつけ量や水分量を調整している。		

ヒューマンヘリテージ安源寺・EASTユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアの見守り、声かけ介助を行い、歯みがきのチェックをしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	オムツをできる限り使用しないで済むように、排泄パターンを把握し、排泄の声がけ、誘導をしている。排泄表をつけて確認している。	自立の方が多い。排泄表に記録し、個々にトイレ誘導している。夜間ポータブルトイレの使用を試みたがうまくいかなかったこともあり、場合によっては医師の指示により薬を出していただき排便を促すなど、トイレで排便をするように支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	野菜・海藻を多く摂取し、水分も多めに摂取していただき体を動かしていただくよう努めている。受診時に医師から便秘薬を処方されている方もいます。排泄表をつけて確認している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴に声がけし、一人ひとりの希望やタイミングに合わせている。毎日の入浴もシャワーも可能である。仲の良い利用者同士で入浴されることもある。	健康管理上から職員や入居者への注意を促すため脱衣所・浴室内に「……洋服を着るまで20分」という張り紙をしている。少なくとも週2回は入浴するようにしている。希望があれば毎日入浴することも可能である。介助を全く受けつけない方がいるが、万が一に備え、静かに気づかれないように見守りをしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの気持ちに合わせた自由な生活を心がけている。昼間は身体を動かす事を支援し、夜間、良眠していただくように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬局の処方箋をご利用者毎にまとめ一冊のファイルに綴り、付箋をつけて見やすいようにまとめてある。各自、お薬手帳をもっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの生活歴(趣味、職業等)を聞き、ここでの役割や楽しみごと等で活かしていただいている。		

ヒューマンヘリテージ安源寺・EASTユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	一人ひとりの希望に沿って戸外に出かけるようにしている。(自宅、美容院、受診、銀行、買物、外食等)	増設前は入居者が数名ずつ職員の車に分乗し、車イスを軽トラックに積んで、皆で外出行事を行った。車椅子使用の方が三分の一ほどと増えており全員で出掛けることは少なくなりつつあるが、少人数での花見やバラ見学、個別での買い物などで外出している。今後はテラスを利用し、お茶を飲んだり、外気に当たったりしたいという意向がある。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	財布を個人で管理できる方には、希望や、力量に応じて支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話は取り次ぎ、かけたい希望がある場合には希望に沿うよう対応している。居室に電話を設置されている方もいる。手紙が届くと本人に渡している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	オールバリアフリーで食堂、居間、廊下と柔らかな照明のもとで安全性に優れた家具を備えている。装飾は季節により変化し、手作りで楽しめる工夫をしている。	玄関を入ると大きな掲示板がありスナップ写真の掲示やアメリカの野球チームのペナントなどが貼られていた。ユニット内はエアコンで温度調節がされている。テレビやソファ、食卓テーブルや椅子などが置かれ、家庭の延長線のように入居者と職員との穏やかな会話が聞こえてきた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間にソファ、廊下にベンチを置き、利用者同士でも楽しめるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた家具、装飾品、電気製品等を自由に持ち込んでいただいている。こたつ等を楽しんだり自由な部屋作りをしていただいている。	ユニットの各居室はエアコンが完備されており、入り口には色違いの表札がわりのボードが付けられている。各居室には自宅より持ち込まれたテレビやタンスなどが置かれている。床にマットを敷いたり、ペット使用の方、布団を使用される方など様々な生活スタイルが繰り広げられている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの状態に応じて居室等にわかりやすい貼り紙をしたりして混乱しないよう工夫している。電気等の設備も本人が使いやすいように直している。		